

私がセネガルで出会った人々は、確かに今の日本人が失ってしまった優しさや誠実さを持っている人もいました。同時におよそ日本人ならまず考えられないようなデリカシーのなさやいい加減さに遭遇する場合も多くありました。特にお金に関わる倫理観があまり重視されておらず、知らない人が自宅に來たと思つたら大抵「お金貸して(返すつもりはないけど)」だったりしますし、ある活動を開始するために預けておいた資金を使い込まれたこともありました。

もちろん、心に残るエピソードもたくさんありました。私の赴任した地域の端の方にある貧しくて小さな村で活動したとき、村人が私たちのために鶏を絞めて振舞ってくれました。鶏はセネガルでは非常に高価な食材とされています。その鶏は痩せていてあんまり食べるところもありませんでしたが、私はありがたく軟骨までいただきました。

私がここで強調したいのは、日本人の多くが持つている、「恵まれない国々のかわいそうな人々」というアフリカ人に対するイメージから、一歩進んで欲しいということ。アフリカの人たちは、何にも悪くないのにかわいそう」という単純なイメージで彼らを捉えている限り、日本とアフリカの距離は遠いままのようにながります。私が実際に滞在したのはセネガルですが、アフリカ人には、いいところも悪いところも

あります。それはわれわれ日本人と同じです。確かにアフリカは、ヨーロッパの植民地だったという歴史や、気候が厳しく作物があまり取れないという不利な条件はいろいろありますが、彼ら自身が努力すれば解決できることをしていないのではないかと、思うこともあります。それは、もしかししたら、私を含め国際協力に係る人々が、少し甘やかしているのかも知れません。

私からのレポートは今回でおしまいです。しかし、私の頭と心の中には、皆さんに伝えたいことがまだまだたくさん残っています。いずれまた機会があれば、もっとアフリカのこと、協力隊のことを知りたいと思う方々とお話できればと思います。

それでは、またいつかどこかでお会いしましょう。Au(オ) revoir(ルヴォワール)(さようなら)!



## お帰りなさい！ 青年海外協力隊員

8月18日(木)、平成15年7月から青年海外協力隊員として海外で活躍していた酒井康子さん(西古泉)が帰国され、来庁されました。

酒井さんはアフリカのマラウイに看護師として派遣され、村や学校での手洗い、トイレの設置などの公衆衛生指導、マラリアやコレラ、エイズなどの病気の予防に積極的に取り組まれました。

首都は非常に発展しているのに、農村部は日本の縄文・弥生時代のような生活を送っていること、発展途上国であるために先進国からの援助に慣れてしまって、人々には自分たちで何とかしようという意識があまりないこと、募金や援助物資の不正ルートが存在し、援助が本当に必要な人々には渡らず、ごく一部の人が恩恵を受けているにすぎないことなど、マラウイでの2年間の生活で体験したことを話してくださいました。



写真を見ながらマラウイでの活動を報告する酒井さん

酒井さんの派遣国での体験や感想を「広報まさき11月号」に掲載予定です。お楽しみに!!